

「物語る」歴史学——親鸞と恵信尼はなぜ夫婦なのか

大澤絢子

はじめに

近代日本の歴史研究は、西洋人文科学の一部とされてきた歴史学の姿勢を基本としている。そこでは、叙述された史料から根拠のない要素を排除し、過去に起こった客観的な事実を再構成することが目指されてきた。本稿では、近代歴史研究における「物語」としての側面に着目し、親鸞(1173-1262/63)の妻とされる女性・恵信尼(1182-?)のイメージの変遷過程を検証する。本稿を通して、「日本仏教」にまつわるイメージが、近代の歴史研究と文学の双方によってどのように構築されてきたのか、その一端を明らかにする。

1. 伝記が語る親鸞の妻

1.1. 検証される伝記

親鸞の人物像形成にとって最も重要な史料の一つが、彼の没後33年目の1295(永仁3)年に成立した絵巻物『親鸞聖人伝絵』(以下、『伝絵』)である。親鸞の曾孫にあたる覚如によって制作された『伝絵』は、早くから絵相部分を抜き出して掛幅にした御絵伝と、詞書を抜き出した『御伝鈔』に分けられ、教団の発展に伴いそれらが全国の末寺に普及していくことで、教団内の親鸞イメージが確立していった¹。『伝絵』の他にも、近世には絵入り親鸞伝や親鸞を取り上げた浄瑠璃も制作され、如来の化身としての親鸞、奇跡を起こす親鸞といった多数のイメージが教団内外で生み出されていった²。

ところが明治に入ると、実証主義的な歴史研究の立場から、親鸞をめぐるそれらの物語が批判的に検証されるようになる。『伝絵』も検証の対象となり、記述内容が史実かどうか、いつ起こったのかが議論され、親鸞の神秘的な要素が排除されていった。歴史上に親鸞という人物はいなかったとするいわゆる「親鸞抹殺論」がささやかれたのもこの時期で、史実の検証が重ねられていくにしたがい、神聖な部分のはぎとられた人間としての親鸞が見出され、この人間親鸞が多くの文学の主題となっていったのだった。

¹ 金龍静『蓮如』(吉川弘文館、1997年)および大澤絢子『親鸞「六つの顔」はなぜ生まれたのか』(筑摩書房、2019年)。

² 塩谷菊美『語られた親鸞』(法藏館、2011年)。

1.2. 生涯夫に寄り添った妻・恵信尼像

一方、現代における一般的な親鸞イメージの大部分を占めるのは、僧侶でありながら妻帯し、恵信尼と呼ばれる女性を妻とした、というものである。親鸞と恵信尼は助け合いながら信仰生活を送ったとされ、この夫婦は真宗寺院の住職とその配偶者である坊守³の理想型として語られる。

例えば、近代の大谷派を代表する僧侶の一人である多田鼎は、教団を支えた重要な女性として恵信尼と娘の覚信尼を挙げ、恵信尼を「教団の母」と呼ぶ。さらに、「宗門の寺族は、此の大なる両女性の高風を仰ぐことを忘れてはならぬ」と述べ⁴、恵信尼と覚信尼を真宗寺院における住職の妻や娘が目指すべきモデルだと位置づけている。

とりわけ恵信尼は、親鸞のよき伴侶としてその人物像が語られる傾向にある。仏教史学者で大谷派の教学を担う講師の藤島達朗は、『恵信尼公』（1956年）のなかで、親鸞が彼女を妻としたことに関して次のように記している。

やがてそなた〔親鸞のこと——筆者注〕は家庭をもつ、その時は私が妻になる、一生共にたすけ合い、やがて導いて往生せしめるであろう、とあった六角堂観音のお告げは、ここに実現しているわけである。即ち聖人は、ひそかに尼公〔恵信尼——筆者注〕を、観音の化身と信ぜられていたのである。（中略）うるわしい人間のあり方かな、人類は、このような夫妻をもったことに、誇と喜びを感じねばならぬと思うことである⁵

「六角堂観音のお告げ」とは、親鸞が29歳の時に京都の六角堂に参籠していた際に受けた夢告を指す。その内容は、たとえおまえが宿報のために女犯をしてしまったとしても、私（救世菩薩）が女性の身になって犯され、臨終の際には極楽へ引導するというものであった⁶。この夢告は「女犯偈」とも呼ばれ、『伝絵』にも記されている出来事だが、ここには結婚⁷や夫婦としてのあり方は全く記さ

³ 近年は男性の坊守もいるが、住職の妻の場合が圧倒的に多い。

⁴ 多田鼎「「寺族の仕事」を語る」（『真宗』1927年1月号）。

⁵ 藤島達朗『恵信尼公』（恵信尼公遺徳顕彰会事務局、1956年）、36-37頁。

⁶ 原文は以下——「行者宿報設女犯 我成玉女身被犯 一生之間能莊嚴 臨終引導生極楽」（真宗聖典編纂委員会編『真宗聖典』真宗大谷派宗務所出版部、2014年、725頁）。

⁷ 平雅行が指摘するように、親鸞の当時は結婚をどこかに届け出ることもなく、夫婦別居や妻が多数の場合も考えられ、結婚の定義は曖昧である（『歴史のなかに見る親鸞』法蔵館、2011年、58頁）。だが歴史研究においても親鸞の妻帯を近代的な結婚と同一視する傾向がある。

れていない。親鸞も自身の妻や妻帯について何も書き記しておらず、『伝絵』にも親鸞の妻帯や妻の描写はない。それにも関わらず藤島は、「家庭をもつ」、「一生共にたすけ合い」といった文言で、夫・親鸞に支えた妻・恵信尼、親鸞に一生寄り添い、極楽へ引導する観音の化身として恵信尼を捉えている。親鸞と恵信尼夫婦に夫婦の理想像を見出し、そこへ家庭的な意味合いと宗教的な意味合いの両方を含ませる語りは、藤島以外にも見られる⁸。

1.3. 親鸞—恵信尼夫婦像の矛盾

そこで問題となるのが、現存する史料には、親鸞の妻を恵信尼一人とするものがほぼ存在しないことである。親鸞の妻子について記した最初の記録は、親鸞没後60年を経た元弘元(1331)年に作成された覚如の『口伝鈔』である。ここには、「恵信の御房男女六人の君達の御母儀」とあり⁹、親鸞の妻は恵信で、6人の子女があったと記されている。しかし、この記述は親鸞の妻を恵信尼一人であったことを証明するものではなく、恵信尼の出自も不明である。次いで天文5(1536)年に九条植道によって制作された西本願寺蔵の本願寺系図では、親鸞の子は7人(記載は善鸞の子どもの如信まで入れて8人)で¹⁰、名前はそれぞれ印信、慈信(善鸞)、明信(信蓮)、益方、女子、女子、女子(左衛門佐広綱室)とあり、如信以外の7人の子すべての母が「月輪殿御女」となっている¹¹。その5年後に作成された実悟編「日野一流系図」(1541年)でも、親鸞の子どもは7人とされているが、印信(範意)の母のみが「後法性寺摂政兼実公女」、その他の子の母は「兵部大輔三善為教女(法名恵信)」とある¹²。つまりこの時点で親鸞の妻は、九条兼実(または月輪殿下)の娘と三善為教の娘の計2人であったということになる。ところが、その約30年後、顕誓による「反古裏書」(1568年)では、末娘の覚信尼の母は恵信であり、恵信は「月輪殿下の御娘玉日」だと記されている¹³。これでは、恵信尼が兼実(または月輪殿下)の娘なのか、為教

⁸ たとえば竹中慧照は、「親鸞聖人の奥方恵信尼公は、つねに聖人を観世音菩薩として崇めたまひ、(中略)尼公が聖人のこよなき内助者であらせられたかを知る」(「真宗婦人の自覚を説く」『真宗』1933年4月号)と記している。

⁹ 『口伝鈔』(前掲『真宗聖典』)、663頁。

¹⁰ 平松令三「西本願寺所蔵 古本本願寺系図について」(『本願寺史料研究所報』第26号、2000年)、3頁。

¹¹ 平松、同前、3-4頁。

¹² 「日野一流系図」(真宗典籍刊行会編『統真宗大系』16巻、国書刊行会、1976年)、156頁。

¹³ 「反古裏書」(真宗典籍刊行会編『統真宗大系』15巻、国書刊行会、1976年)、199頁。

の娘なのか、そして親鸞の妻は1人か2人なのか断定できない。

一方、親鸞の妻帯について記した伝記は『親鸞聖人御因縁』(以下『御因縁』)が最も古く、1288(正応初)年頃から、『伝絵』の制作された1295年以前に制作されている¹⁴。ここで親鸞は、妻帯しない出家者の念仏と、妻帯する在家の念仏の違いはないということを証明してほしいという月輪ノ法皇の願いを叶えるため、法然の命によって法皇の七女・玉日を妻としたとされる。親鸞の妻となった玉日に対して法然は、「子細ナキ坊守ナリ」だと声をかけ、それより「一向専修ノ念仏ノ一法場のアルシ」を坊守と呼ぶことになったという¹⁵。これが坊守の起源となる物語である。

『御因縁』では、系図に出ていた月輪殿と思われる人物が登場し、その娘の玉日が親鸞の妻となったと語られている。『御因縁』以降の親鸞伝では、これとほぼ同じ内容で親鸞の妻帯の様子が記され、「月輪ノ法皇」は九条兼実で、娘の玉日が親鸞の妻となる経緯が語られていく¹⁶。近世の親鸞伝で最も影響力が大きかったとされる『高田親鸞聖人正統伝』でも、親鸞は「月輪殿下兼実」の願いによって、彼の七女である玉日を妻にしたとある¹⁷。恵信尼について『高田親鸞聖人正統伝』では、玉日が早世した後に常陸の国にて娶った三善為教の娘・朝姫が後に出家して恵信と名乗ったとされる。だが、恵信尼に関する記述はごくわずかで、出自の詳細や親鸞との結婚の経緯も言及されていない。兼実の日記『玉葉』を詳細に分析した多賀宗隼によれば、兼実の娘は2人で、一人は後鳥羽天皇の中宮となった宜秋門院任子であり、一人は4歳で夭折しているという¹⁸。そのため7番目の娘という玉日が実在した可能性はきわめて低いが、近代以前の伝記のなかでは、親鸞の妻として中心的に語られるのは、玉日であって恵信尼ではない。恵信尼が全く登場しない伝記もあり、親鸞の妻を恵信尼ただ一人とするものはなく、坊守をめぐる物語は、玉日について語られたものなのである。

¹⁴ 塩谷菊美「解題」(真宗史料刊行会編『大系真宗史料伝記編1親鸞伝』法蔵館、2011年)、451頁。

¹⁵ 「親鸞聖人御因縁」(豪撰寺蔵写本)(前掲『大系真宗史料伝記編1親鸞伝』)、5-6頁。「親鸞聖人御因縁」と呼ばれる伝記の写本はいくつかあるが、親鸞が法然の命によって月輪の法皇の七女を妻とし、彼女を「坊守」と呼ぶのは、西本願寺蔵写本、旧上吉谷道場蔵写本、弘誓寺蔵本、慈願寺蔵本のいずれの伝記にも共通している。

¹⁶ 大澤絢子「浄土真宗の「妻帯の宗風」はいかに確立したか——江戸期における僧侶の妻帯に対する厳罰化と親鸞伝の言説をめぐって」(『日本研究』第49集、2014年)。

¹⁷ 「高田親鸞聖人正統伝(享保二年以降板本)」(前掲『大系真宗史料伝記編1親鸞伝』)、178頁。

¹⁸ 多賀宗隼『玉葉索引——藤原兼実の研究』(吉川弘文館、1974年)。

2. 親鸞と恵信尼はいつから夫婦とされたのか

2.1. 恵信尼文書発見以降の文学上での親鸞夫婦

では近代以降になぜ、そしていつから、親鸞の妻は玉日ではなく恵信尼一人とされるようになったのか。

親鸞の伝記は明治に入ってからも多く刊行されているが、明治後期になるまでは、前近代の親鸞伝から派生したものが多かった。そのため親鸞の妻も、玉日一人か、玉日が亡くなった後に娶ったのが恵信尼だとされている。明治以降、親鸞の生涯を物語的に表現した初めてのものは、1909(明治42)年の須藤光暉の『愚禿親鸞』だが、ここでも親鸞は玉日を妻としたとされ、玉日は恵信尼と同一人物とされている¹⁹。

近代になって、恵信尼の存在が浮かび上がった大きなきっかけは、1921(大正10)年の「恵信尼文書」(恵信尼から娘の覚信尼に宛てた手紙10通)の発見である。これと時をほぼ同じくして、「親鸞ブーム」と呼ばれる親鸞の流行現象が起こっていたため、まずはこの時点での恵信尼の扱いを整理しておく。

倉田百三の『出家とその弟子』(1917年)の人気から火がついた親鸞ブームは、大正11(1922)年前後の数年間に起こり、親鸞を題材とした小説や戯曲が立て続けに発表された。主要な作品のみを挙げても、【大正11年】石丸梧平『人間親鸞』(1月)、江原小弥太『親鸞』(3月)、香春建一『戯曲親鸞』、小松徹三『燃え出づる魂(親鸞の新生)』(4月)、石丸梧平『受難の親鸞』(6月)、三浦関造『親鸞』(7月)、村上浪六『親鸞』(7月)、茅場道隆『戯曲親鸞』(8月)、松田青針『人間苦の親鸞』(11月)、山中峯太郎『戯曲親鸞聖人』(11月)／【大正12年】吉川英次²⁰『親鸞記』(1月)、須藤光暉『親鸞聖人』(11月)がある²¹。

ブームを代表する石丸の『人間親鸞』をはじめ、この時期の作品のほとんどは青年期の親鸞の性欲や妻帯を主題としている²²。だが、この時期の作品は親鸞の妻は玉日となっているものが中心で、親鸞の妻を恵信尼一人と設定しているものは全くと言ってよいほどない。玉日以外の妻を登場させた作品として、山中の『戯曲親鸞聖人』と吉川の『親鸞記』があるが、どちらも玉日と死別後の

¹⁹ 須藤光暉『愚禿親鸞』(金尾文淵堂、1909年)、103頁、254-255頁。この作品以前に福井了雄『親鸞聖人』(1895年)があるが、これは親鸞の生涯における出来事を時系列に並べて記したものである。ここでも親鸞は玉日を娶ったとされ、恵信尼は登場しない。

²⁰ 吉川英治の本名。

²¹ 大正期の親鸞流行を論じたものに、千葉幸一郎「空前の親鸞ブーム素描」(五十嵐伸治・他編『大正宗教小説の流行——その背景と“いま”』論創社、2011年)がある。

²² 大澤絢子「大正期親鸞流行と親鸞像」(『佛教文化学会紀要』27号、2018年)。

妻とされる。「恵信尼文書」が発見されたにも関わらず、大正期の文学上では、「親鸞—恵信尼」夫婦像よりも「親鸞—玉日」夫婦像の方が圧倒的に優位なのである。

2.2. 親鸞の妻は一人か複数か

では、歴史研究の立場はどうか。先述したように、親鸞の伝記の検証は明治後期に盛んになる。村田勤の『親鸞真伝——史的批評』(1896年)を皮切りに、如来の化身として親鸞を讃えてきた伝記への批判的検証がなされ、生身の人間としての親鸞の姿が露わにされていった。大学のアカデミック史学としては、長沼賢海の「親鸞聖人論」(1907年²³)が初めて『伝絵』の記述を徹底的に検証し、現存する史料のうちで親鸞が自身の生涯について記した唯一の記録と言える『教行信証』の「後序」までも親鸞の筆ではないと判定した。さらに親鸞ブームと同年には、中沢見明が『史上の親鸞』(1922年)で、『伝絵』に込められた覚如の教団形成に対する戦略的意図を指摘した²⁴。中沢は在野の研究者であったが、確実な史料のみに基づく合理的手法によって史実を明らかにしていく姿勢は、その後の研究に大きな影響を与えたのだ²⁵。

歴史研究の立場から、親鸞の妻が恵信尼と確定されはじめるのは、「恵信尼文書」発見の数年後からである。発見から2年後、発見者で本願寺派の仏教史学者・鷲尾教導が『親鸞の室玉日の研究』(1923年)のなかで恵信尼の周辺状況を検証した。だが、その書名のように、鷲尾はそれまでの玉日伝説を否定しつつも、恵信尼についての記述の箇所に「玉日」と記入するなど名称の混同がある²⁶。

その後、大正期末に大谷派講師の安井広度が『親鸞聖人と恵信尼の面影』(1925年)にて、親鸞の妻が恵信尼一人であることを前提に恵信尼消息のうちの五通を解説している。しかし、恵信尼文書の発見以降一貫して、親鸞の妻は恵信尼一人となったわけではなかった。先に挙げた『史上の親鸞』のなかで中沢は、恵信尼が親鸞にとって三人目の妻だと主張しており、昭和に入ってから、大谷派の仏教史学者である山田文昭が親鸞の妻は恵信尼を含めた2人以

²³ 『史学雑誌』に1907年から10回にわたり連載。1928年に『日本宗教史の研究』として刊行。

²⁴ 中沢見明『史上の親鸞』(文献書院、1922年)。

²⁵ 平松令三『親鸞』(吉川弘文館、1998年)、14頁。

²⁶ 恵信尼の晩年を検証した章も「玉日の晩年と往生」と題されている(鷲尾教導『親鸞の室玉日の研究』中外出版、1923年)。

上だと論じている²⁷。その後も、大谷派の仏教学者の藤原猶雪(『真宗史研究——親鸞及び其教団』1939年)が3人説、本願寺派の仏教史学者・宮崎圓遵(『親鸞とその門弟』1956年)が2人説を主張している²⁸。

これらの研究では、いずれも玉日の実在は否定されている。それにも関わらず妻の人数が2人以上とされている理由は、親鸞の晩年の書状にある「いまこせんのはゝ」という文言と、親鸞に対して親鸞が「まゝはゝにいるまどわされた」との言葉を使っていたこと、さらに前掲の「日野一流系図」に親鸞の長男の母として、恵信尼とは別の女性の名(「後法性寺摂政兼実の女」)が記載されているためである。

たとえば藤原は、「いまこせんのはゝ」を恵信尼以外の妻だとし、「まゝまはゝ」という言葉は善鸞にとって恵信尼が継母である証拠であって、親鸞には恵信尼の他に2人妻がいたと主張する。また宮崎は、長男は恵信尼とは別の女性との間の子ともとして、「まゝまはゝ」との言葉は、善鸞が実母である恵信尼を誹謗するためにあえて使ったのだと主張する²⁹。

ここでは恵信尼が継母か否かの議論には立ち入らないが、「恵信尼文書」の発見があっても他の史料を検証していけば、親鸞の妻が複数であったことも主張されうるのである。このように、1960年代以前の歴史研究では、親鸞の妻を複数とする説が多数あったことをここで確認しておく。

3. 親鸞と恵信尼はどのような夫婦か

3.1. 昭和期における文学上の親鸞と恵信尼夫婦像

「恵信尼文書」の発見の数年後から、玉日説を否定しながら親鸞の妻が恵信尼一人か複数か議論を重ねていく歴史研究に対し、文学上では戦後に至るまでそうした動きは見られない。文書発見直後の大正期の作品では、「親鸞—玉日」夫婦を取り上げているものが圧倒的に多いことは先に述べたが、昭和に入ってもしばらくは親鸞の妻が玉日一人と設定されている。

²⁷ 山田文昭遺稿刊行会編『山田文昭遺稿 第一巻(真宗史稿)』(破塵閣書房、1934年)、259-260頁。山田は玉日伝説を否定しつつ、親鸞の子どもの母の問題から「聖人には二人の配偶者と六人の子のあつたことは確実である」と述べている(同書、260頁)。

²⁸ 藤原猶雪『真宗史研究——親鸞及び其教団』(大東出版社、1939年)、206頁。宮崎圓遵『親鸞とその門弟』(永田文昌堂、1956年)、37頁。このほか、服部之総(『続・親鸞ノート』福村書店、1950年)が、親鸞の妻は3人説をとっている。

²⁹ 「いまこせんのはゝ」について、赤松は覚信尼説をとり(赤松俊秀『親鸞』吉川弘文館、1961年、123頁)、宮崎は即生房の母を主張している(宮崎、前掲『親鸞とその門弟』、23頁)。

たとえば、1931(昭和6)年刊行の高島米峰『本願寺物語』では、親鸞は玉日と共に流罪の地である越後に向い、その後関東でも玉日と同居し、玉日は出家して恵信尼になったとされる³⁰。吉川英治の『親鸞』(1938年)でも、親鸞は法然の命に従って九条兼実の娘・玉日を妻としている。玉日没後の妻として恵信尼らしき妻が登場するのは物語終盤の関東時代であり、名前は「朝姫」である³¹。

ところが、1960年代になると、文学上においても玉日が全く登場しなくなり、70年代以降では、親鸞の妻は恵信尼一人として描写されるようになっていく。大正期の親鸞ブーム以降に親鸞を取り上げた主要作品に、吉川英治『親鸞』(1938年)³²、丹羽文雄『親鸞とその妻』(1960年)、『親鸞』(1969年)、松田良夫『上越の親鸞と恵信尼——つつましき愛』(1927年)、松田良夫『信じて愛して——親鸞と恵信』(1989年)、津本陽『弥陀の橋は』(2002年)、『無量の光』(2009年)、五木寛之『親鸞』(2010-14年)がある。このうち吉川『親鸞』では、それまでの作品と同じく玉日が親鸞の妻となり、親鸞は玉日の死後に関東で三善為教の娘・朝姫と再婚する。一方、丹羽の『親鸞とその妻』では、玉日が登場しない。しかし妻が恵信尼一人というわけではなく、親鸞は京都で福子という玉日とは別の女性と結婚して子どもをもうけ、越後では他の女性(住女)とも関係し、善鸞が生まれている。恵信尼が登場するのは終盤であり、恵信尼も再婚で連れ子がいる³³。この作品では、生別と死別を経て親鸞は合計3回結婚したことになる。

次いで、丹羽の『親鸞』に至ると、親鸞は京都で承子という女性と結婚し、越後で筑前(恵信尼)に出会い2度目の結婚をする。ここでは、親鸞と恵信尼の関係の描写の比重が大きく、丹羽は親鸞の史実や親鸞と日蓮の比較、恵信尼文書の読み解きなど所々に歴史研究の成果を盛り込んでいく³⁴。その後、松田の『上越の親鸞と恵信尼——つつましき愛』、『信じて愛して——親鸞と恵信』は、親鸞の妻を恵信尼一人として越後での出会いと結婚、夫婦愛を描き、津本と五木の作品でも親鸞の妻として登場するのは恵信尼一人である。

以上のように近世以来、親鸞の妻として取り上げられてきた玉日は、吉川『親鸞』を最後に登場しなくなる。文学上の親鸞の妻は、丹羽『親鸞』までは恵信

³⁰ 高島米峰『本願寺物語』(実業之日本社、1931年)。

³¹ 吉川英治『親鸞 天の巻』『親鸞 地の巻』(大日本雄弁会講談社、1938年)。

³² 1948年に再版されたものがベストセラーとなっている。

³³ 丹羽文雄『親鸞とその妻』(新潮社、1957-59年)。

³⁴ 丹羽文雄『親鸞』(新潮社、1969年)。

尼を含めた2人だが、70年代以降の作品では、親鸞の妻は恵信尼一人となっていく。

3.2. 夫に付き添う恵信尼像

一方、歴史研究では、その前段階の1950年から60年にかけて、越後時代の親鸞について議論されていた³⁵。「恵信尼文書」からは晩年の恵信尼が越後で暮らしていたことが分かり、親鸞は越後に流罪になったとされている。そのため、親鸞が恵信尼と結婚したのは京都か越後か、越後出身の恵信尼と京都で結婚して夫婦で流刑地の越後に向かった否かが議論され、越後と親鸞に関する研究が重ねられてきた。

その議論を担った中心的研究者が梅原隆章(『親鸞伝の諸問題』1951年)、藤島達朗(『恵信尼公』1956年)、宮崎圓遵(『親鸞とその門弟』1956年)、松野純考(『親鸞——その生涯と思想の展開過程』1959年)、赤松俊秀(『親鸞』1961年)である。このうち、梅原、藤島、松野は親鸞の妻を恵信尼一人とし、宮崎と赤松は越後で恵信尼と再婚したと論じている。

親鸞は5年間配流生活を送ったと記しているものの、どこに流罪になったのかは記しておらず、親鸞の越後時代に関してはほとんど記録がない。流刑地については、『歎異抄』に「越後国」とあり³⁶、『伝絵』には「国府」とある³⁷。それが越後国国府(新潟県直江津)であったと推測されるため、梅原をはじめとする研究者たちは、親鸞と恵信尼が越後で妻帯するに至った経緯や恵信尼の出自を明らかにしていった。

こうした成果を受け、1970年に入って郷土史家の平野団三が親鸞と恵信尼夫婦の生活の実態を明らかにしていった。彼は親鸞の越後での生活に焦点を当て³⁸、恵信尼の出自を検証し、現在の国府別院の地を親鸞が暮らした竹ノ内草庵があった場所だとして、親鸞と恵信尼夫婦の生活の実態を論じていった。越後での親鸞と恵信尼の生活を証明する確実な史料はなく、平野が根拠とした『御伝鈔改補照蒙記』も近世に作られた伝記である。しかし、1950年から60年にかけての歴史学者による研究と70年以降の平野の成果によって、親鸞と

³⁵ 由谷裕哉「親鸞の越後配所を巡る記憶の生成と確立」(『三田社会学』14号、2009年)、112頁。

³⁶ 「歎異抄」(前掲『真宗聖典』)、641頁。

³⁷ 「御伝鈔」(前掲『真宗聖典』)、732頁。

³⁸ 平野団三『越後と親鸞——恵信尼の足跡』(柿村書店、1971年)。

恵信尼が越後で共に暮らしたことが次第に定着していった³⁹。

注目したいのは、越後での親鸞と恵信尼を取り上げた梅原、藤島、宮崎、松野、赤松が、親鸞の帰洛にも恵信尼が同行し、晩年まで京都で付き添っていたと主張している点である。これについて由谷裕哉は、彼らの研究がいわば良き坊守としての恵信尼像を描いている点で共通していると指摘する⁴⁰。

晩年の恵信尼が越後で暮らしていたことは確かだが、恵信尼が親鸞の京都行に同行したことを示す記録はない。しかし梅原は、親鸞が帰洛したと考えられる頃に覚信尼はまだ幼く、「幼児を母親から手離すことも忍びなかったので恵信と共に京都につれて帰ることとなし⁴¹」と、恵信尼と覚信尼が親鸞に同行したと論じ、「或る事情による親鸞家庭の分裂から、恵信と夫婦別れをして京都と越後に分散したとか、或は東国に恵信をのこして親鸞が京都に帰ったという見方には、俄かに同致し難い」と述べる⁴²。その理由として、夫婦間に何らかの溝ができて別居したとは考えにくく、恵信尼の越後行は、「見舞や孫の世話などの為に旅行したのであつて、その要件が終れば再び京都の親鸞のもとへ帰る予定であつたであろう」と結論づける⁴³。親鸞が帰洛する際に妻子を伴っていたことを事実とするのは宮崎も同様で、「越後から同行した親鸞夫婦が帰京に当たつて別居しなければならない理由があつたであろうか。寧ろ同行したと考えるのが自然ではないか」と記している⁴⁴。赤松も宮崎の論を支持し、「夫婦は容易に別居すべきものではないこと、親鸞には恵信尼以外に妻がなかったと考えられること、恵信尼が親鸞の晩年の京都の生活をよく知っていたらしいこと」を理由に、「恵信尼は当然親鸞に同伴して関東から京都に帰京したと見るべきである」と断言する⁴⁵。帰洛後の夫婦の生活については梅原が、「恵信尼は京洛にあつて親鸞と家庭をまもっていた」と述べ⁴⁶、恵信尼が晩年まで越後に帰らなかったのは、「夫の親鸞が生存しているので、その身の世話を為さねばなら

³⁹ 由谷は、梅原、藤島、宮崎、松野、赤松らアカデミックの歴史研究者の越後真宗史への言及を整理し、彼らの言説が上越地方の郷土史家に親近感を持たれたと指摘している(由谷、前掲、112-115頁)。

⁴⁰ 由谷、前掲、113頁。

⁴¹ 梅原隆章『親鸞伝の諸問題』(顕真学苑、1951年)、281頁。

⁴² 梅原、同前、281頁。

⁴³ 梅原隆章『真宗史の諸問題』(顕真学苑、1959年)、64頁。

⁴⁴ 宮崎、前掲『親鸞とその門弟』、81頁。元となった論文は、『龍谷史壇』第36号、1952年。

⁴⁵ 赤松、前掲『親鸞』、256頁。

⁴⁶ 梅原、前掲『親鸞伝の諸問題』、313頁。

ない情愛から、京を去る気持ちには容易になれなかった」と論じている⁴⁷。

こうした研究者たちの「語り」には、子を育てる母や、夫と共に生活し、夫を支える妻との価値観が如実に表れている。彼らは史料に基づくのではなく、夫婦同居、夫寄り添った妻・恵信尼像を前提にして、帰洛に際しての同行を主張しているのである。恵信尼が帰洛を共にしたという確実な史料や根拠がないにも関わらず、「夫婦は容易に別居すべきものではない」、「当然親鸞に同伴して」、「情愛」といった文言によって親鸞に寄り添って生きた妻・恵信尼とのイメージづけがなされているのだ。

3.4. 親鸞のたった一人の妻・恵信尼

こうした歴史研究の動向を受けて、丹羽は『親鸞』で親鸞と恵信尼の夫婦を取り上げ、親鸞の帰洛に同行して夫を支える妻・恵信尼像を描き出していった。先述したように、この作品に登場する親鸞の妻は合計2人だが、恵信尼の描写に多くが割かれ、親鸞と恵信尼夫婦が物語の中心となっている。その後、松田の『上越の親鸞と恵信尼——つつましき愛』や『信じて愛して——親鸞と恵信』では、そのタイトルのように夫を支えた恵信尼のつつましきや親鸞への愛情が謳われ、親鸞と共に信仰の道を歩んだ恵信尼が語られる。そしてこの作品以降、親鸞の妻は恵信尼一人しか出て来なくなる。津本『弥陀の橋は』および『無量の光』や五木『親鸞』でも、親鸞と恵信尼夫婦の仲睦まじさや、信仰を同じくして共に歩む夫婦の姿が描かれるのである。津本の『弥陀の橋は』と『無量の光』では、丹羽の『親鸞』と同様に恵信尼は親鸞の帰洛に同行するが、五木『親鸞』では同行しない。しかしどちらの作品も、親鸞が恵信尼を「このうえもない好伴侶」、「おたがいにあげましあい、力を合わせて生きてきた」「同志」などと描写しており⁴⁸、互いに支え合った親鸞と恵信尼の夫婦のイメージが定着していく。

文学上において、親鸞の妻は近代以降、1950年代までは前近代の伝記を元にするかたちで玉日とされていた。しかし60年代以降は、歴史研究の成果を受けて玉日の存在が語られなくなり、70年代以降は文学上でも、親鸞の妻は恵信尼一人だと設定されていく。創作である以上、文学作品が親鸞の妻を誰とするか、夫婦をどのように描くか、あるいは史実を元にするか否かは自由である。注目すべきは、史実を明らかにする歴史研究において、研究者のイメージ

⁴⁷ 梅原、同前、314頁

⁴⁸ 津本陽『無量の光 親鸞聖人の生涯 下』(文藝春秋、2009年)、196頁および五木寛之『親鸞 激動編 下』(講談社、2012年)、225頁。

が先行して歴史上の人物像が語られている可能性である。親鸞の帰洛に同行した恵信尼像には、一夫一婦制や夫婦同居、夫を支える妻といった近代的な家族観・ジェンダー観が重ねられている。現存の史料からは、親鸞の妻を恵信尼一人と断定することができない。それにも関わらず夫を支えた妻・恵信尼のイメージが1950年から60年代の歴史研究によって大きく打ち出されたことで、親鸞のたった一人の妻・恵信尼像が文学においても描き出されてきた。

近年の歴史研究では、歴史学者の今井雅晴が恵信尼を「自分の意志で生き方を選択した」自立した女性とし⁴⁹、親鸞の帰洛には同行しなかったとしつつ、親鸞と恵信尼は共に信仰の道を歩んだと論じている。一方、同じく歴史学者の小山聡子は、晩年の恵信尼が五輪塔の建立や死装束に執着していたことから、恵信尼の思想が親鸞とは明らかに異なっており、彼女が親鸞を尊敬していたのは確かだが、だからといって同じ信仰をもたなくてはいけないということにはならないと指摘している⁵⁰。こうした恵信尼像にも、時代ごとに変化する女性観の影響が垣間見える⁵¹。

おわりに

親鸞と恵信尼はなぜ夫婦か、それは1921年の恵信尼文書の発見によるころが大きい。しかし、親鸞と恵信尼がどんな夫婦かを考えたとき、仲睦まじく共に暮らす夫婦・夫を支えるたった一人の妻という恵信尼イメージは、必ずしも史実検証に基づいた結果だとは言えない。歴史上の人物のイメージは、歴史研究と文学それぞれが関わって形成されている。それは事実か創作かという二項対立的なものではなく、それぞれが過去に対して叙述した物語の積み重ねでもある。その物語は語り手の価値観から離れて成立しているものではなく、親鸞と恵信尼の夫婦イメージも、史実と物語のあいだを行き来しながら今後も変化していくだろう。

親鸞と恵信尼夫婦にまつわる言説が、教団関係の研究者によって発信されてきた点も無視できない。教団内でも知名度と地位のある寺院出身の研究者たち

⁴⁹ 今井雅晴『恵信尼 親鸞とともに歩んだ六十年』(法蔵館、2013年)、vi。

⁵⁰ 小山聡子『浄土真宗とは何か——親鸞の教えとその系譜』(中央公論新社、2017年)、134頁。

⁵¹ その他、平雅行は『親鸞聖人御因縁』や『親鸞聖人正明伝』の記述に明らかな誤りが多いことから玉日説を否定する。平は「みぶの女房」を善鸞の実母だとし、親鸞の妻を恵信尼と2人とする(『歴史のなかに見る親鸞』法蔵館、2011年、105-114頁)。一方、松尾剛次は玉日の実在を主張して、玉日と玉日との結婚を語る伝記が恵信尼の血筋である本願寺によって意図的に排除されたと主張する(松尾剛次『親鸞再考——僧にあらず俗にあらず』日本放送出版協会、2010年)。

が自分たちのなかにある夫・父(住職)を支える妻や母(坊守)のイメージを親鸞と恵信尼の夫婦に投影して関係を解釈し、それがまた教団内の共通の価値観として住職と坊守の關係に転用されてきた可能性もある。恵信尼を坊守の理想としていた多田の言葉に先立つ1925(大正14)年、大谷派では坊守規程が制定され、坊守は住職の内助だけではなく、門信徒の模範であるべきことが明記された⁵²。この規程は58(昭和33)年に廃止されたが、坊守に内助や将来住職になる子の教育を求めるような傾向は依然としてある。親鸞と恵信尼という中世を生きた夫婦のイメージは、現代の実社会にも根深く繋がっているのである。

⁵² 『真宗』、1925年10月号。